

「巡検会報告」

阿蘇火山中央火口丘群の地質

合志小学校 麻生弘幸

標記の巡検会が10月22日、熊大・渡辺一徳先生の案内で、25名が参加して行われた。

主な目的は、中央火口丘群の過去の地質の観察と、中岳の活動の見学である。

以下、観察地点を順に紹介する。

熊大を出発し、陣内経由で阿蘇に入り、登山道路赤水線を登った。①湯の谷温泉入口の沢では、中央火口丘群の中では最も塩基性(S:O₂49%)の吉岡溶岩を見学・採集した。②赤水線料金所北東100mの地点では、約6300年前の鬼界アカホヤ火山灰「Ah」と阿蘇火山中央火口丘第1軽石「Acp-1」との関係を観察した。ここではAhの1.2m上にAcp-1の降下軽石層が露出している。軽石は径5~10cmで、黒雲母流紋岩質である。これまで阿蘇火山では、約22000年前の始良Th火山灰「AT」以降には、酸性マグマの活動はないと見られていたが、このAcp-1が新たに確認された。噴出源は明らかではないが、軽石の粒径や層厚から、湯の谷付近または蛇ノ尾付近と推定されている。

③上米塚駐車場からは、蛇ノ尾・米塚のスコリア丘を遠望した。蛇ノ尾は、より新しい火山灰層に厚く覆われ、米塚より地形の浸食も激しく谷地形が多いため、Ahよりも古い可能性もある。また蛇ノ尾の中に、もう一段新しい火口地形があるようにも見れ、山腹でデイサイトの転石が見られること等から、Acp-1の噴出源とも考えられるようである。

米塚(約1700年前)は、スコリア丘の脇から、北・北西方に溶岩が流下しているのが、地形からわかった。③地点そばの、有料道路沿いでは、上米塚の小スコリア丘の断面を観察できた。

④草千里展望台からは、この日、今年22回目の噴火をした中岳の噴煙と降灰の様子を

観察した。(第2図)

⑤火山博物館では、同館の池辺伸一郎氏の御厚意により、火口カメラのコントロール室を見学させていただいた。火山灰の付着により、映像は不鮮明であったが、891火孔と892火孔が一つになっている様子などを見学した。

⑥山上広場は、連日の降灰で面白っぽ火山灰で覆れていた。積もった火山灰の断面を見ると、下位より、黒色・赤色・白色と成層しているのがわかった。赤い灰は、噴出力の弱まりにより火道内のマグマ頂部が下がり、火山灰が火道内に滞留し、その間に高温のために酸化したためと解釈できる。白い灰は、火道内の天井の崩落により、類質の変質岩が混じり、それが出たためと考えられる。次に阿蘇山測候所内を見せていただいた。入口には、午前中に火口縁まで飛ばされた人頭大の噴石が置いてあったが、まだ温もりが感じられた。

⑦仙酔峡有料道路入口から300m先の西側の沢では、厚いAhをはさんで、その前後の中央火口丘群の噴出物(火砕流・サージ・降下火砕物)が累重しているのがわかった。これには、中岳・米塚・往生・杵島の降下スコリア層やAcp-1などが含まれる。それらを一ずつ識別・追跡し、噴出源を求め、年代の目盛りを入れてゆくことで、6000年以降の中央火口丘群の活動史が編めるであろうと説明を受け、帰路について。

ご多忙の折り案内していただいた渡辺先生に感謝申し上げます。巡検報告とします。

(夏期巡検会報告はスペースの都合で次回に回します。係より)

発行所

熊本地学会誌	№92
熊本市黒髪2丁目	熊本大学教育学部
地学研究室内	熊本地学会
TEL 344-2111	振替熊本 6-5359